

カルカソヌ世界選手権報告²⁰¹⁴ 望月 隆史

今回、日本代表としてカルカソヌ世界選手権に参加して参りました望月です。一生に一度の機会という念もあり、悔いのないようにと勝負に挑んだ所、見事に優勝を飾る事ができ非常に満足しています。

さて、世界選手権に参加して感じた事は、やはり世界の競技レベルの高さです。彼らの一手一手は非常に鋭く的確で、少しでも油断しよう物ならあっという間にコマを潰されてしまいます。

また、彼らは競技プレイとしてのギャンブル性のコントロールも熟知しており、普段よく実力と運の比率が7対3と言われるカルカソヌが、あの場では9対1にも、あるいはそれ以上にも感じました。



そんな彼らの中において、私は少なからず緊張していました。

特に、2敗したら決勝に進むのが極端に困難になる(※1)この大会においては、1敗同士の戦いは和やかなムードの中にヒヤリと冷たい緊張感が漂っています。相手の一手、自分の一手、その都度にゾクゾクする思いでした。

しかし、不思議とその緊張によって手が鈍る様な事は無く、寧ろ普段以上に鋭い手が打てました。良い緊張というものがあるのかも知れません。

(※1) 編注: 今回は4勝2敗が8人並び、うち1名が決勝進出。



彼らはプレイマナーも非常に良く、とても紳士的な振る舞いが印象的でした。対戦前対戦後の握手は勝ち負けに関わらず快いものでしたし、写真の撮影なども快諾してくれました。

彼らのような実力と真摯さを兼ね備えたプレーヤーが集まる場にディフェンディングチャンピオンとして来年も参加できる事を誇りに思います。

そして目指すは2連覇ですね。



さて、カルカソヌ世界選手権は今年で9回目の開催ですが、簡単に今までの戦歴を振り返ってみましょう。

まず、初年度から5回目まではドイツ代表が優勝。流石のドイツといった所ですね。その翌年がオランダ代表、次にチェコ代表、そしてギリシャ代表、ときて今年になります。

この戦歴から読み取れるのはここ数年で各国の競技レベルが格段に上がっていると言う事です。

また、それはヨーロッパ圏だけでなくアジア圏でも言える事で、今年は4人のアジア国代表が全員上位に入る活躍を見せています。(※2)

(※2) 編注: 全34ヶ国中、8位台湾、10位マレーシア、11位香港。

では、各国の競技レベルはどのようにして培われるのでしょうか？
それは、各国の選手権の体系にあるのではないかと思います。
私が日本選手権と世界選手権、そしてその前日に開催されていたドイツ選手権
を見て感じた事は、日本選手権の競技大会としての質の高さです。

日本選手権では、全国から予選の開催主を募り、首都圏と地方の隔たり無く全
てのカルカソヌプレイヤーが参加出来るようになっています。
本戦への出場枠は人数によって変わり、予選の規模の大小も考慮されているの
も素晴らしいですね。

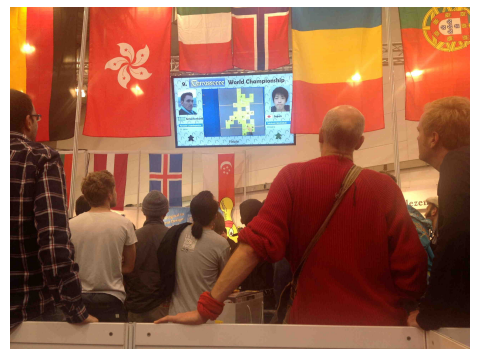


本戦においては、チェスクロックのアナログデジタルの差はありますが、6回
の予選をへて上位4名が準決勝・決勝を争うという方式は、世界選手権と全く
同じ構成になっています。

世界選手権に出場する身としては、
この同じ構成というのが非常にあり
がたく、慣れない地でのプレイに少な
からず余裕を与えてくれました。

また、世界選手権以上に優れている点として、動画の撮影・配信が挙げられま
す。

今年は、決勝戦の動画に解説を付けて動画サイトにアップロードするという、カ
ルカソヌ界では恐らく初と思われる試みが行われ、より競技カルカソヌの間
口を広げたように思います。



更に言えば、日本選手権の上位プレイヤーは世界レベルで見ても遜色
の無い強さで、日本カルカソヌ教会やカルカソヌ研究所の存在の大き
さを感じます。

しかも、年々競技レベルは上がっているようで、来年の日本選手権が楽し
みでしかたがありません。

来年は日本選手権5周年、世界選手権10周年の節目です。来年、そし
てそれ以降もカルカソヌが愛され続ける事を願っています。

《準決勝》

第1試合

- Pantelis Litsardopoulos (ギリシャ) [85]
- Matej Tabak (スロヴァキア) [77]

第2試合

- Ricardo Gomes (ポルトガル) [93]
- 望月隆史 (日本) [131]

《決勝》

- Pantelis Litsardopoulos (ギリシャ) [87]
- 望月隆史 (日本) [104]

《3位決定戦》

- Matej Tabak (スロヴァキア) [90]
- Ricardo Gomes (ポルトガル) [88]

